

大伴旅人
山上憶良
大伴百代
沙弥満誓

大宰府にて

帥 大伴旅人邸では、今夜も宴が催されている。
宴もたけなわ、客人たちはそろそろ時間を気にするそぶりだが、
気にもせず煽るように酒を飲み続ける旅人。
遠巻きに見守るは旧知の仲、憶良。
そこへ宴の客人の一人、大伴百代が憶良の元へ近寄り何やら
そっと耳打ちをする模様…

百代 「このところの旅人様の酒の量には、目に余るものがございます。
従人たちも心配しております。明日の仕事にも差し障りが…
ここは、そろそろ憶良様のお声でお開きにしては頂けませぬか。」

憶良 「まあまあ、無理もございません。
慣れぬ大宰府の生活、
酒を飲んで憂さを晴らしたい時もあることでしょう。
ここは気の済むまで好きにさせてあげましょう、
もとは心の強い旅人殿のこと。
今はただただ見守りましょう。」

旅人 「おおーい。そこで難しいお顔で話をされているお方がた、
何をそんなに考え込んでおられる、さあ！こちらにきて飲みましょう！」

～駿なき物を思はずは一杯の濁れる酒を飲むべくあるらし～
～古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし～

百代「憶良様、憶良様…誠に、そろそろお願いできますまいか。」

憶良「さてさてどうしたものか…いかが致しましょうかな。
ひとつ歌を詠ってみましょうか」

～憶良らは今は罷らむ子泣くらむ それその母も我を待つらむそ～

旅人「何をおっしゃる、まだまだ帰るなど許されませんよ憶良殿。
母であろうと子であろうと、
こんなにも楽しい夜を、どうして終わらせることができるのであろうか。」

憶良「～銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも～」

旅人「～価なき宝といふとも一杯の濁れる酒にあにまさめやも～
～夜光る玉といふとも酒飲みて心を遣るにあに及かめやも～
～言わむすべせむすべ知らず極まりて貴き物は酒にしあるらし～

ああ、
酒の席にてわかったようなお顔で、
さも良さげなことを説くお方が聖人ならば、
酒の名を聖と名付けた昔の大聖人の方がどんなにか素晴らしいことか！
～酒の名を聖と負せし古の大き聖の言の宜しさ～

ああ、醜い醜い、実に醜い。
賢ぶって、酒を飲まずにしたり顔の誰かさん、
よく見るとまるでお猿にそっくりではないか！」

～あな醜 賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見ば猿にかも似る～」

憶良「ははは、旅人殿は面白いことをおっしゃる。
私の顔が、お猿とな。
ならば、今宵は 物真似の勝負をいたしましょうか、
私がお猿、そなたは何をいたされる。」

旅人「それは面白い勝負。ならば私は酒壺になりましょう。
私が勝てば憶良殿には朝までお付き合いいただきましょう。」

憶良「酒壺は動いてはいけませぬぞ、目を開けてもいけませぬ。
物を申されてもいけませぬぞ、酒壺は。
どうかどうか、どっしりと構え、目を瞑り口も瞑り」

旅人「ああなりましょう、なりましょうとも酒壺に。
～なかなか人にあらずは酒壺になりにてしかも酒に染みなむ～」

憶良「いざ勝負、それ！ひと一つふた一つ」

客人たちに目配せをし、今のうちに家へと帰るよう促す憶良。
つま先立ちでそろりそろりと、目で礼を言いつつ帰る客人たち。

旅人「はあ、つまらぬ、つまらぬ。実につまらぬ酒壺は。
声も出せず、目も開けられず、歌も詠えぬとは何も楽しゅうない。

～生ける者つひにも死ぬるものにあればこの世なる間は楽しくをあらな～」

憶良「まだまだこれから、み一つ、よ一つ」

旅人「やめじゃ、やめじゃ、こんなつまらぬ物真似は。
この世で酒を飲んで楽しくいられるのなら、
来世は虫にでも鳥にでも私はなろう」

～この世にし楽しくあらば来む世には虫にも鳥にも我はなりなむ～」

憶良「ほう。次のお題は、虫と鳥ですとな。

それでは、そなたは虫に私は鳥になりましょう、それ！コーコーコキヤー」

大きく手を羽ばたかせ 鳥の真似をする憶良、
負けじと 虫の真似をしようとするが、
なかなかどうして、酔いも廻ってうまくできぬ旅人。

旅人「ダメじゃダメじゃ目が廻って仕方がない。

虫など、どうして鳥に勝てるわけがない。」

憶良「ならば、私は得意のお猿の鳴き真似を」

旅人「ええい、ならば私は赤子の泣き真似を」

憶良「キヤーキヤー」

旅人「えーんえんえーん ええーんえんえーん」

猿の真似をする憶良の横で、
赤子のように寝そべり体をよじって泣く旅人。

旅人「憶良殿、知っておられるか。世間でもてはやされる風流の道なんぞに
なまじ励むよりは、酔泣きすることの方がよっぽど良いのですぞ

～世間の遊びの道にかなへるは酔ひ泣きするにあるべからし～」

憶良「それは良い良い、それは良い、キヤーキヤー」

旅人「ええーんえんえん ええーんえんえーん」

憶良「まだまだ、負けませぬぞ、キヤーキヤー」

旅人「こちらとて負けませぬとも、ええーんえんえん、ええーんえーん」

～黙居りて賢しらするは酒飲みて酔ひ泣きするになほ及かずけり～

憶良「お泣きなさい、お泣きなさい、お気の済むまで。

私も一緒に泣きましょう。

ええーんえんえん ええーんえんえーええーんえんえん」

～賢しみと物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするし優りたるらし～

泣き真似をする旅人の目から涙が溢れていた。

それを癒すかのように、

憶良は尚も大きな声で一緒に泣き真似をした。

しばらくすると、泣き疲れた子どものように、

旅人はぐっすりと寝入ってしまった。

そっと見守りほほえむ憶良。

礼を言う百代。

成り行きを見守り、帰らずにいた客人の沙弥満誓が、

旅人に綿を着せつつ静かに歌を詠った。

～しらぬひの筑紫の綿は身につけていまだは著ねど暖かに見ゆ～

夜が明けるまでには、もうしばらく時間がある。

憶良、百代、沙弥満誓の三人はそっと静かに乾杯をした。

～世間を何に譬へむ朝開き漕ぎ去にし船の跡なきごとし～

<歌一覧>

卷3・337 山上憶良臣の宴を罷るの歌一首

憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむぞ
憶良めはもう失礼いたしましょう。家では子どもがいないでしょう。
その子の母も私の帰りを待っていることでしょう。

卷5・803 山上憶良

しろがね ぐがね
銀も金も玉も何せむに勝れる宝子しに及かめやも
銀も金も玉とても、何の役にたとう。すぐれた宝も子に及ぶことなどあろうか。

卷3・338 大宰帥大伴卿の酒を讃むるの歌十三首

しろし
駿なき物を思はずは一杯ひとつきのにごれる酒を飲むべくあるらし
つまらない物思いをするより一杯の濁り酒でも飲むようにあるようだ

卷3・340

古の七の賢しき人どもも欲りせしものは酒にしあるらし
昔の七人の賢人たちも欲しいと思ったものは酒であるらしい

卷3・345

あたひ
価なき宝といふとも一杯の濁れる酒にあに益さめやも
値段のつけられぬ宝といたって、たった一杯の酒よりどうしてまさっていよう。

卷3・346

夜光る玉といふとも酒飲みて情こころを遣るにあに若かめやも
人々の珍重するという夜光る玉だって、酒を飲み憂さを晴らすことにどうして及ぼうか。

卷3・342

言わむすべせむすべ知らず極まりて貴きものは酒にしあるべし
言いようも、しようもないほど、極めて貴い物は、酒であるらしい。

卷3・339

ひじり おほ いにしえ おほ
酒の名を聖と負せし古の大き聖ことの言のよろしさ
酒の名を聖と名付けた、昔の大聖人の言葉の良さよ

卷3・344

みにくさか
あな醜賢しらをすと酒飲まぬ人をよく見れば猿にかも似る
なんと醜いことよ。りこうぶって酒を飲まぬ人をよく見ると猿に似ているなあ。

卷3・343

なかなか人にあらずは酒壺さかつぼになりにてしかも酒に染みなむ
中途半端に人間であるよりは、酒壺になりたかったものを。
そうなって酒に染みていよう。

卷3・349

生ける者つひにも死ぬるものにあればこの世なる間は楽しくをあらな
生あるものはいずれ死ぬものであるのだから、この世にいる間は酒を飲んで楽しく
過ごしたいものだ。

卷3・348

この世にし楽しくあらば来ぬ世には虫に鳥にも我はなりなむ
生きている今を楽しく過ごせたのなら、来世には虫にだって鳥にだって私はなろう。

卷3・347

世間の遊びみやびの道にすすしくは酔ひ泣きするにあるべくあるらし
世間でもてはやす風流の道になまじ励むよりは、酔泣きすることが良いらしい。

卷3・350

黙然もだをりて賢しらすは酒飲みて酔ひ泣きするになほ若かずけ
余分なことは言わずに利口ぶった振る舞いをするのは、酒を飲んで酔っ払って泣き言を言
うのに、やっぱり及ばないのだなあ。

卷3・341

賢しみと物言ふよりは酒飲みて酔ひ泣きするし優りたるらし
利口ぶって何かと物を言うよりは、酒を飲んで酔っ払って泣く方がまさっているらしい。

卷3・336 沙弥満誓の綿を詠める歌一首

しらぬひ筑紫の綿は身につけていまだは著きねど暖かに見ゆ
しらぬひの筑紫の綿は身につけてまだ着たことはないが、暖かそうに見える。

卷3・351 沙弥満誓

世間よのなかを何に喩へむ朝びらき漕いぎ去にし船の跡なきがごとし
この世を何に喩えよう。朝港を出ていった船の引く跡がわずかの間で跡形も無くなって
しまうようなものだ、、、といおうか。

山上憶良臣・宴を罷る歌一首から、
大宰帥大伴卿・酒を讃むる歌十三首より着想を得ました。
滑稽な物真似をする旅人と憶良に大いに笑い、
友情のあたたかさに涙する人情味ある話を作りたいと思い、
今回の舞台は狂言にしました。

卷3・337 山上憶良臣、宴を罷る歌一首

「憶良らは今は罷らむ子泣くらむそれその母も我を待つらむそ」から始まり、
卷3・338 大伴旅人の酒を讃むる歌十三首を順に詠み進めると、
まるで自分がこの宴席に参加し、丁々発止の旅人と憶良のやりとりが目の前に現れ
思わず苦笑いしてしまうほどに、宴の世界に引き込まれていきました。

この十三首については諸説あり、
宴の終盤、酒に酔った状態では、さすがの旅人でも十三首もの歌を詠めるはずがない、
日頃、机上で考え書き溜めていた歌では？
もしくは、旅人が様々な宴の場面で詠んだ酒の歌を、
のちに編纂者がひとつの宴の場面になるようにと、取りまとめたものでは？と
お酒を嗜む方、そうでない方によって見解は随分と変わるようです。

お酒を嗜む側の私にとっては、憶良に始まり旅人十三首の歌の流れは、
自分が経験したことのある現代のお酒の席、そのものと同じ自然の流れに思えるのです。

また卷3・331より帥大伴卿の歌5首があり
ここでは、宴の前半の様子が見えてきました。

卷3・331

わが盛また変若めやもほとほとに寧樂の京を見ずかなりな

卷3・332

わが命も常にあらぬか昔見し象の小河を行きて見むため

卷3・333

浅茅原つばらつばらにももの思へば故りにし郷しおもほゆるかも

卷3・334

わすれ草わが紐に付く香具の山の故りにし里を忘れむがため

卷3・335

わが行きは久にあらじ夢のわだ瀬にはならずにて淵にあらぬかも

全ての歌に置いて、大宰帥となった自分を憐れみ
往時の政治状況を回顧し奈良の都をなつかしむ旅人の孤独、憂いが見えてきます。

現代で言うならば、差し詰め
スーツ姿の背中が並ぶ、
夕日の暮れたガード下の居酒屋さんで聞こえてくる声でしょうか。
思わず光景が浮かび、うんうんとうなずいてしまいます。

宴が進むに連れ、
何度も繰り返し、似た言い回しでお酒に酔うことの正当性を訴える旅人の姿にも、
やはり、いつかみたような光景を思い出し親近感を覚えます。
かつての上司？友人？もしかしての私自身、、、？
唯一無二の親友憶良に心から甘え、帰ってほしくない駄々をこね、
負け惜しみする旅人の姿には思わず頬が緩みました。

そして宴のあと……

しーんと静まりかえった時間に味わう
あのなんとも形容し難い心持ちを、沙弥満誓が言い表します。

「世間を何に喩へむ朝開き漕ぎ去にし船の跡なきごとし」

まさに、と思わず唸ってしまいました。

